

中ソ関係

1689年のネルチンスク条約以来の歴史的な露清関係（帝政ロシアと清との関係）から現在の中華人民共和国とソ連邦との関係までを含む国際関係の現代国際関係のうえでは、1950年代の中ソ社会主義両大国の「一枚岩の団結」の時期、60年代の「中ソ論争」から「中ソ対立」の激化に至る時期、70年代の「中ソ冷戦」の時期、80年代の中ソ関係修復・改善の時期、そして1989年5月の世紀のサミットともいえるゴルバチョフ・鄧小平会談以降の中ソ和解の時期にほぼ区分できる。

中ソ関係は、(1) 民族と民族の関係、(2) 国家と国家の関係、(3) 党と党の関係、(4) 政府と政府の関係の四つの関係の総体として形成されてきたのであるが、いわゆる中ソ対立は、中ソ両民族の歴史的角逐に加えて、スターリンの中国政策、毛沢東の強烈な対ソ民族意識を基軸にして歴史的に形成されたものであった。

しかも、ここでの中ソ関係は、第二次大戦後のアジアの新しい国際秩序の形成過程において、また同時に中国革命の勝利と中華人民共和国の生成の過程において、中ソの友好と一枚岩的団結の神話を表層としながら角逐し、曲折し、あるいは接近と離反そして反発と和解の相互作用を繰り返してきた歴史的過程であり、きわめて壮大な歴史のドラマを構成してきたのであった。

中ソ関係は毛沢東＝フルシチョフ時代以来の中ソ対立によって特徴づけられてきたが、中国が毛沢東モデルを脱して経済改革を進め始めた1980年代初頭より大きく変化し始め、さまざまな分野の中ソ交流がふたたび回復し

始めた。

こうした状況のなかで、ソ連共産党のブレジネフ書記長は、その最晩年の1982年3月、タシケントで中ソ和解の呼びかけを行った。このブレジネフ演説は、中国側もこれを積極的に受け止める姿勢を示すとともに、やがて、中ソ改善にとっての「三大障壁」（①中ソ国境・中蒙国境におけるソ連軍の駐留、②ベトナムのカンボジア侵攻へのソ連の支持、③アフガニスタンのソ連軍駐留）という条件を提起し、三大障壁が存在する限り中ソ改善は進まないという立場を示した。しかし、1984年末には中ソ間に長期貿易取決め、科学技術協力協定などが徐々に結ばれるなど、中ソ和解への歩みはさらに進んだ。

こうして中ソ関係は着実に改善されつつあったが、そのようなときソ連共産党のゴルバチョフ書記長は1986年7月、ウラジオストクでよりいっそうの中ソ関係の改善を求めた演説を行い、中国側の主張する「三大障壁」についても、モンゴルやアフガニスタンからの撤兵計画を示すなどで、きわめて積極的な方針を提起した。

このようなプロセスののちに1989年5月中旬、民主化運動の高揚のなかをゴルバチョフ書記長が訪中し、一連の中ソ首脳会談で党と政府の双方の中ソ関係が改善された。しかし、民主化運動を同年6月4日の天安門事件によって抑圧した中国は、ペレストロイカを進めつつあるソ連に同調せず、中ソ関係はなお微妙な段階にあるといえよう。

（中 嶋 嶺 雄）

中ソ対立

国際共産主義運動におけるイデオロギー論争からやがて中ソ間の国家間の対立に発展した深刻な対立。広大なユーラシア大陸の東岸から内陸の中央アジアにいたるまで、7600キロになんなんとする国境を連ねて、ソ連と中国という巨大な国家が相対峙しているという地政学的現実からしても、ロシア民族と漢民族という、いずれも他民族を統合・同化しようとする衝動の強い二つの民族の近 300年来の出会いの歴史は、きわめて摩擦の多いものであった。

だが、1949年の中華人民共和国成立以降、毛沢東中国の「向ソ一辺倒」宣言や双方の「中ソ友好」のスローガンがあまりにも華々しく喧伝されたがゆえに、社会主義陣営の団結という虚構が、あたかも真実であるかのようにみなされ、中ソの一枚岩的団結というく神話>が形成されて、外部世界を含むほとんどすべての人びとがこの神話にとりつかれてきたのであった。

いわゆる「スターリン批判」を敢行した1956年2月のソ連共産党第20回大会は、両体制間の平和共存、世界戦争の可避・不可避、社会主義への移行の多様性という命題や、スターリン個人崇拜の問題をめぐって中ソ両共産党間のイデオロギー的・論理的不和をもたらす発端となり、やがて潜在的な中ソ論争の過程を経て、60年以降には中ソ論争が公然化し、中ソの一枚岩的団結という神話も音をたてて崩壊してしまった。しかも、歴史的事実としては、中ソ関係ははやくも1958年の台湾海峡危機前後の時期に、一方では中ソ間の深刻な利害対立としての軍事防衛抗争を通し、

他方では、中国内部の人民公社、「大躍進」政策をめぐって、深刻な決裂を見ていたことが明らかになっている。

やがて中ソ関係は、60年以降の中ソ論争の公然化から63年夏の中ソ両党会談決裂による中ソ対立へ、次いで69年春と夏の中ソ軍事衝突へと発展し、さらに70年代に入るや、他方における米中接近の到来に比して、まさに“中ソ冷戦”ともみなしうるグローバルな国際政治上の抗争となっていた。

このような中ソ論争から中ソ対立へ、そして“中ソ冷戦”へという歩みは、たんに中ソ両国関係のみならず、いわゆる冷戦サブ・システムとしての中ソ関係の転換によって国際政治の流動化をさらに促進し、中越関係やソ越関係に見られるように、とくにアジアの国際環境を大きく変動させたのであった。だが、“中ソ冷戦”は中国における非毛沢東化の進展によって中ソ対立をもたらした要因が解消したのちには、徐々に中ソ和解の方向へ変化していった。非毛沢東化の進展という中国内政との関連で中ソ関係を見るかぎり、1980年代以降は政府間関係はもとより党と党との関係においても、中ソ関係が改善され得る要因が成熟しつつあったのである。この点では、鄧小平ら旧実権派指導者の対ソ認識・対ソ態度が、毛沢東の対ソ認識・対ソ態度とは根本的に異なっていたことに注目せざるを得ない。中国の対外姿勢は必ず内政の変化を反映して自律的に動くのであり、内政要因は国際政治のパワー・ポリティックスの要因よりも強いと断言してよいであろう。

こうした歴史的な潮流のなかで、1982年3月のブレジネフ書記長による中ソ和解への呼びかけ（タシケント演説）、86年7月のゴル

バチョフ書記長による中ソ改善へのウラジオ
ストック演説を経てついに中ソ対立は中ソ和解
へと進展し、89年 5月のゴルバチョフ訪中
では、5月16日の鄧小平との中ソ首脳会談で党
と国家のレベルでの中ソ関係が正常化され、
30年以上にわたる中ソ対立に終止符が打たれ
た。しかし、ゴルバチョフ訪中によって盛り
上がった中国民主化運動は6・4天安門事件
の悲劇をもたらし、さらに1989年後半以来の
東欧、ソ連の民主化と脱社会主義化の大きな
歴史の転換に直面して、中国共産党は再びイ
デオロギー的な対ソ批判を内部で再開してい
る。しかし、戦後国際政治史を彩ったような
中ソ対立はおそらく再発しないであろう。

(中嶋 嶺 雄)

中ソ友好同盟相互援助条約

1950年代の中ソ両社会主義国の「一枚岩的団結」のシンボルとして、外交・軍事・経済・文化など各分野の協力関係を規定した条約であり、東西冷戦時代の歴史的産物であった。1950年 2月14日、毛沢東、周恩来らの訪ソによってスターリン、ヴィシンスキーとの間でモスクワで調印されたこの条約は、日本の軍国主義的復活への協同阻止をうたった条約本文および中国長春鉄道や旅順・大連の返還などに触れた二つの付属協定および交換公文から成っている。

1949年10月の中華人民共和国建国に先立って「向ソ一辺倒」政策へと転じていた中国側の期待に反したソ連側の高圧的な態度によって条約交渉は難航し、中国側にとっては、この中ソ対立の遠因にも成った。

しかし、西側世界、とくにアメリカは、この条約の締結によって「中国チトー化」政策の失敗と断じ、米中対決へと向かっていった。60年代からの中ソ対立で有名無実化し、中国側は1979年 4月、翌年の30年間の満期以後この条約を延長する意思のないことを一方的に通告した。

(中 嶋 嶺 雄)

井

不平等条約であった